

## 抗美援朝の中国を訪れて—瀋陽・丹東への旅—

藤目ゆき

**抗美援朝戦争の故地を訪ねる旅** 2013年11月4日から7日にかけて、西田千津さん、神田修さん、梁東淑さんと共に中国東北地区の瀋陽と丹東を訪れた。朝鮮戦争(1950～1953)時代の中国女性運動、とくに国際民主女性連盟(Women's International Democratic Federation: WIDF)が1951年5月に朝鮮北部に派遣した国際女性調査団に対する中国女性団体の関与がどのようなものであったのか。それを調査する活動の一環として、瀋陽と丹東の故地を訪ねる旅行であった。

「朝鮮戦争」は、中国では「抗美援朝」戦争と呼ばれる。「朝鮮戦争」という呼び方では、「朝鮮で起きた戦争」という以上の意味も内容も伝わらない。が、「抗美援朝」という表現なら、中国側のこの戦争に対する関与の意味が明白である。国連軍を率いた米国(中国語では「美国」)による侵略戦争に抗して祖国を守るとともに、「兄弟国」たる朝鮮民主主義人民共和国を支援する。それが、中国側がこの戦争に参戦した理由に他ならない。

抗美援朝戦争は、正規軍ではなくボランティアの義勇軍が援朝に赴いたという形ではあれ、実質的には中華人民共和国が国を挙げてたたかった戦争である。中国の女性たちは、志願軍に入って朝鮮へ行った人もいれば、中国国内で戦争勝利のための世論喚起や中国人民志願軍と朝鮮人民軍に対する寄付金募集、軍人とその家族に対する慰労活動、朝鮮からの難民救助といった様々な後方活動を担った人も多い。WIDFに加入する中華全国民主婦女連盟(ALL-China Women's Democratic Federation: ACWF)はそのような中国女性たちの抗美援朝運動を組織した中心団体であり、1951年のWIDFが派遣した国際女性調査団の受け入れ・調査活動の実施のために重要な役割を果たしている。瀋陽は、国際女性調査団が最初に全員集合した場所である。丹東は中国・朝鮮国境にあり、国際女性調査団はここから鴨緑江を渡った。このような理由から、私たちはアジア現代女性史研究会(CAWA)最初の中国調査旅行として、先ず瀋陽と丹東を訪ねたいと考えたのである。

このように調査テーマは大きく、三日間だけの滞在とはいえ瀋陽・丹東の多くの場所に行っているいろいろな物を見、さまざまな感慨を抱いた。その全部を書き尽くすことは無理なので、今は研究テーマに直接つながりのあることに限って振り返っておきたい。

**瀋陽市図書館にて** 11月4日には、瀋陽で梁さんの到着を待つ間、神田さん・西田さんといっしょに瀋陽市内を散策し、図書館や本屋へ行ってみた。

1951年のWIDF調査団や翌52年のモニカ・フェルトンによる中国・朝鮮再訪は、中国の抗美援朝史に残る重要事項である。たとえば、瀋陽市図書館で閲覧した柴成文・趙勇田『抗美援朝紀実』(中共党史料出版社、1987年、84～85頁)には、WIDF調査団が訪朝して、米軍の戦争犯罪を弾劾する報告書を出したことにも言及がある。

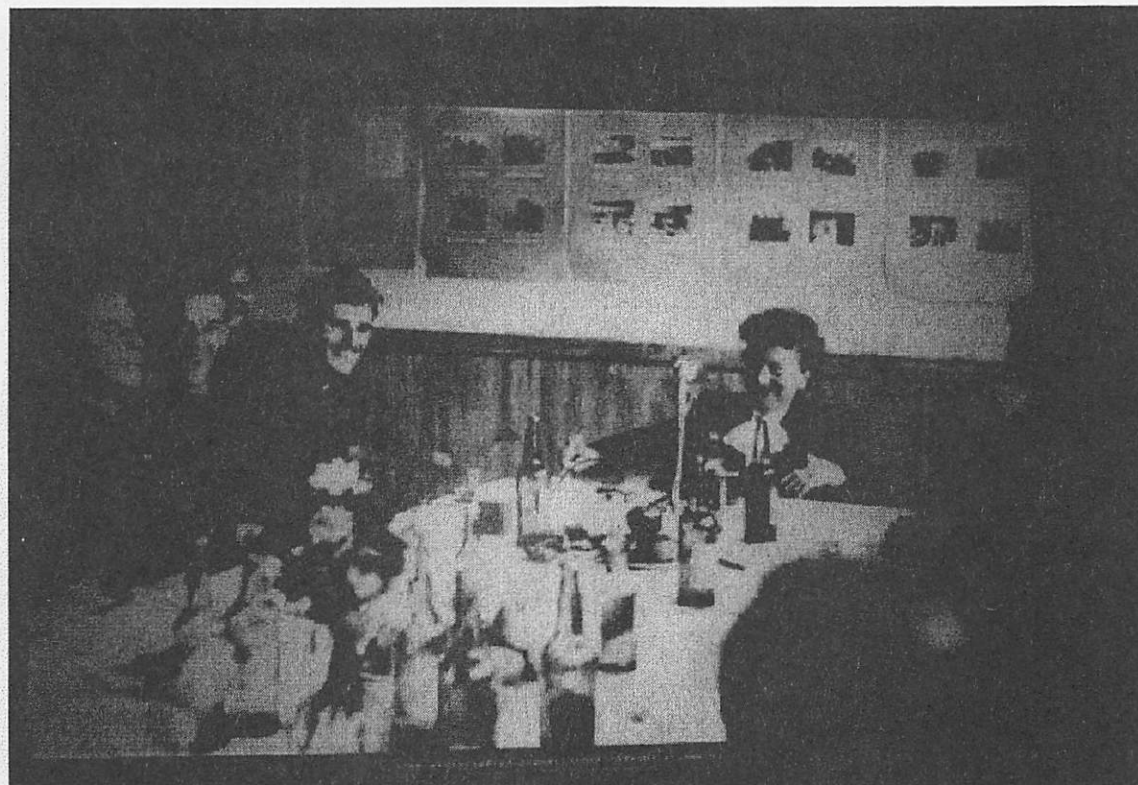
ところが、『沈阳市志』を閲覧すると、その108頁にある52年9月17日の項目に、「スターリン賞受賞者—英国の平和戦士モニカ・フェルトン夫人が瀋陽に到着、22日に瀋陽の

高坎にある衣料生産合作社を参観」といった記録がみえる一方、51年5月の項目を見ても、WIDFの国際女性調査団が瀋陽に集ったことは書かれていない。モニカ・フェルトンの『だから私は朝鮮へ行った』によると、51年5月、外国から来た調査団員たちは瀋陽滞在中、丸二日間ホテルに缶詰状態であった。そのとき中国側を代表してオリエンテーションを行った白朗は、各国代表の女性たちに対して、「どこにスパイがいないとも限らないから、ホテルから出るべきではない。身体を動かしたかったら、ホテルの裏庭がありますよ」と伝えたという。各国代表のレセプション会場には報道関係者も来ていたようだが、この時点ではWIDF調査団一行の受け入れは、AWCFにとってはビッグイベントであったものの、中国政府・瀋陽市にとってそれほど能動的なものではなく、全体としては盛大に広報することについてむしろ慎重であったのかもしれない。対照的に、翌52年秋にフェルトン夫人が中国に来たときは、スターリン平和賞の受賞者であり中国国家の特別来賓という破格の厚遇であった。『沈阳市志』の年表にはその違いが表出しているのかもしれない。

**抗美援朝記念館の見学** 4日夜、青島経由で瀋陽に到着した梁東淑さんも合流し、夕食のあと約3時間半バスに乗り、国境の街・丹東に到着した。5日には朝から抗美援朝記念館を訪ね、午後遅く、鴨緑江の「遊覧船」で対岸（共和国）を見学。そのあと抗美援朝烈士の墓所を訪問、最後にコリアタウンを散策して朝鮮料理を食べ、夜遅くなって鴨緑江にかかる断橋と中朝友誼橋の近くにあるホテルに帰った。

抗美援朝記念館は広大な建物で、内容も充実していた。この記念館だけでも中国にやってきた甲斐があるというものだ。

モニカ・フェルトンが52年秋に訪中・訪朝をしたときの写真も展示されていた。



これは、本号に載せた白朗のルポルタージュ「平壤七日」にも報告された、フェルトンと英米の捕虜たちの会談の写真である。フェルトンら当時の平和運動家が伝えた、英米捕虜たちが収容所で人道的な処遇を受けており、一日も早い停戦と帰国を望んでいるとの情報は、平和擁護の国際運動を高揚させた。なおこの写真の撮影直前の8月31日、国際科学委員会が米軍の細菌戦に関する調査報告を公表している。左下の写真は、科学委員会を構成した科学者たち。左から3人目は、スウェーデンのストックホルム市立病院管理局中央臨床研究所のアンドレア・アンドリーン博士。彼女は WIDF 副会長としても活躍した。



細菌戦について告白するイノック中尉

朝鮮戦争下、米軍による細菌戦を供述した捕虜は、国防総省の報告 (*The Report of the Secretary of Defense's Advisory Committee on Prisoners of War*, 1955年8月) によれば、38人にのぼる。最初に告白したのが米空軍 B26 爆撃機の航空士 K・L・イノック (Kenneth L. Enoch) 中尉と操縦士ジョン・クイン (John Quinn) 中尉であった。彼らはすこぶる長い供述をして、52年5月にはそれが北京から世界に発表されている。

記念館には、朝鮮戦争当時、国連軍参加諸国で展開した自国軍の朝鮮派兵に反対する平和運動に関する展示もあった。



(1951年6月に米国で行われた平和パレード)



(英国で行われた朝鮮派兵反対デモ)

中国女性たちの抗美援朝活動は多岐にわたる。多数の展示写真の中から、ACWF に関連する写真のみ紹介しておこう。



漢口の女性たちの抗美援朝デモ

写真左上の女性は子どもを抱いて、「母親たちは祖国・平和・子どもたちを守る」という趣旨の幟を手をしている。右上は、ACWF 副会長であった鄧穎超が、帰国した志願軍の女性たちを歓迎する集いでスピーチをしている写真である。



中华全国民主妇联主席邓颖超在欢迎志愿军归国代表团妇女代表时的讲话  
Deng Yingchao, Vice-chairman of the All-China Democratic Women's Federation delivered a speech when welcoming the former representatives of Volunteers Delegation

ACWF は 1949 年春に誕生した中国女性の統一戦線組織であり、創立時は何香凝が名誉会長、蔡暢が会長、鄧穎超・李徳全・許広平が副会長に就任し、1953 年春にその 5 人に加え、宋慶齡が名誉会長、史良と章蕴が副会長に選出された。次の写真は、宋慶齡が天津の各界を代表する女性たちと共に寄付金募集活動のために集まったワンシーンである。女性たちの力で飛行機「天津婦女号」を寄付するという取り組みであった。



**九一八歴史博物館** 6日は朝に丹東を出発し、瀋陽に移動。九一八歴史博物館を見学した。これは、1931年の「九一八事変」（「満州事変」）に始まる日本の侵略戦争と中国の抗日戦争に関する博物館である。入館して最初に見た展示ケースの中に、日本軍国主義に関する井上清先生の著作を見つけた。嬉しくなって、「これはぜひ写真を」とシャッターを切ろうとしたところ、案内ボランティアの学生がやってきて笑顔で「撮影は不可」とのこと。

井上清先生のことや、澤地久枝さんの『もう一つの満州』のことなどを思い起こしながら館内の展示を見学した。調査テーマである抗美援朝戦争との関連で特に印象深かったのは、細菌戦・七三一部隊と日本人捕虜収容所（撫順戦犯管理所）の展示であった。

日本軍による細菌戦が中国の人々にとってどれほど苦しく惨い体験であったか。館内の展示からその重大さがひたひたと感じられ、中国の人々の経験に即して朝鮮戦争を見つめる重要性を強く意識する機会になった。中国の人々の体験に視点を置けば、抗日戦争から抗米戦争への展開は一連なりの受難と抵抗の歴史といえる。細菌戦もしかりである。日本軍は細菌戦の効果を試すために七三一部隊が人体実験を行い、細菌兵器は実戦でも使われたが、東京裁判はそれらを不問に付した。その背景に七三一部隊の情報を利用しようとする米軍の意図があったことはよく指摘されている。それからまもない朝鮮戦争中、中国側は米軍が細菌戦を実行しているとして多数の証拠を提出して世界に訴え、捕虜になった米軍人たちも38人が細菌戦への加担を告白し、1952年に現地調査を行った国際科学者委員会も、細菌戦が行われていると認定した。だが米国政府はこれを否定し、クインらは米国に戻ると自分の発言を撤回した。米国側では捕虜たちの告白はおしなべて「拷問」や「洗脳」によるものと説明され、今日まで米国政府は一貫して細菌戦を否認している。このようにして、細菌兵器は1940年代前半の日本軍から50年代後半の米軍へと引き継がれ、日米両国政府が互いに庇い合い、共に今日まで責任を逃れてきたともいえる。

撫順戦犯管理所は、1950年ソ連より中国へ引き渡された900人以上の日本人や「満州国」の戦犯を収容した施設である。溥儀もここに収容されていた。この施設に関する展示も、米軍の細菌戦という同じ問題を全く別の角度から考える大きなヒントになった。なぜなら、朝鮮戦争の最中、米軍の細菌兵器使用疑惑は国際社会に衝撃を与えたが、中国政府の主張や科学者たちの報告と同様に、あるいはそれら以上に、世界中の人々を眩目させたのは、自らの罪を告白したジョン・クインら米軍捕虜たちであったからである。

抗美援朝記念館に展示されていた、モニカ・フェルトンと捕虜たちの写真をもう一度見てみよう。楽しそうな、明るい表情の捕虜たちの姿がそこにある。この写真のなかにクインは写っていないようだが、このときに同じ捕虜収容施設でフェルトンはクインに会っており、彼はそのときフェルトンにも自分の罪を語り、その告白は何ら強制されたものではないと話した。52年10月の北京で開かれたアジア太平洋平和会議や同年12月のウィーン平和会議の場で、彼らと語りあった内容をフェルトンは伝えている。その時点でフェルトンが捕虜たちの証言の真実性を信じていたことに疑いの余地はない。だが、朝鮮戦争が停戦を迎え、捕虜たちが米国へ帰還すると、米国側では彼らが拷問や洗脳によって虚偽を供述するよう強制されたにすぎず、彼らが抑留中に語った米軍の残虐行為や細菌戦といった戦争犯罪は事実無根だと扱われるようになってしまった。中国で「帰郷したら、米国民に真実を知らせる」と主張していた捕虜たちが、実際に米本国へ帰国したとき、どのよう

な圧力を受けたかは想像に難くない。が、いずれにしろ、彼らはその告白や証言を撤回してしまったのである。一体、彼らは本当に、中国側からの拷問や洗脳によって事実でないことを言うよう強いられたのだろうか？

私は捕虜たちの告白とその撤回について多面的に考察したいと考えてきたが、撫順戦犯管理所に関する展示をまじまじと眺めている内に、当時の中国が捕虜をどう扱ったかという角度から考える重要性に気づいたのである。図書室、スポーツ、運動会、学習会。一連の写真が、撫順戦犯管理所においては収容者に対する人道的配慮や脱軍国主義教育が重視されていたことを示す。言うまでもなく、抗日戦争に完全勝利を果たした後の日本人戦犯を収容する施設と依然として交戦中である米軍の捕虜たちの収容施設を同列に論じることができない。が、撫順戦犯管理所と朝鮮戦争捕虜収容所は、建国まもない中国が捕虜に対する人道主義的処遇を重視し、その高い倫理性を世界にアピールしようとしていた同じ50年代前半に運営されていたことも事実である。撫順戦犯管理所にいた日本人の認罪の経験を考えることは、朝鮮戦争捕虜たちの認罪を考察する上にも意味があるだろう。パネルの中にあつた島村三郎さんの写真をヒントに、瀋陽から日本に戻るとさっそく島村三郎さんの『中国から帰った戦犯』（日中出版、1975年）などを取り寄せて読んだ。いつか稿を改めてその感想も書きたいと思う。

九一八歴史博物館の後、瀋陽市内にある抗美援朝烈士の墓所を訪ね、張学良も行ったという奉天時代からあるレストランで夕食をとり、夜はホテルで研究報告と感想会。翌7日には早くも帰国である。同行者たちのおかげで、日・中・韓とマルチカルチュラルな観点で東アジアの過去と現在を眺めることができ、楽しい旅になった。心に深く残ったこともふくめ、この報告文に書くことができなかつたことも多い。これからも調査を続け、次の報告書にこの報告の続きを書きたいと思う。西田さん、神田さん、梁さん、たいへんお世話になりました。これからもよろしくお願ひします！